

協和とうとう会 会員名簿

①この名簿は昭和55年12月から56年1月にかけて取材した原稿により作成した。

②名簿の記載事項は、氏名・所属・流派・生年月日・住所・自己紹介とし、原則として取材時のものを使用している。

③協和社員以外の所属は、最も近い時期に所属していた事業場との関係を示した。

あらい 純 (本社・観世)



昭和13年、三田尻で、陶山先生(素人だが、先々代観世喜之師の高弟を自認さる)に手ほどきを受け、終戦直前、先生が出雲に隠棲されるまで、大変熱心に稽古に励みました。昭和23年より津田康由師につき、現在に至っています。25周年を秘かに自祝する心持ちをこめて、昭和48年秋、能楽堂でワキ清水要之助、地頭坂井音次郎の両師らで、卒都婆小町をつとめたことは、いつまでも残るであろういい思い出です。

あきやま やすし 安 (本社・観世)



多忙を理由に最近は全く練習をしておりません。これではいけないと思っていますのでが……。

あきやま かずこ 秋山和子 (富士工場社員家族・宝生)



“うとう会”を脱会してから、もう何年になるのでしょうか。すっかり謡曲のことを忘れていました。久しぶりに練習本を取り出してみて若い日のことが思い出されます。思わず口走った「鶴亀」。調子が出てだんだん声が大きくなりましたが、子供の「お母さん、今の何? へんな声だね」にはがっかり。しばらく続けて練習し子供に笑われないようにしたいと思います。

あさい のぼる 浅井昇 (四日市工場・観世)



私が謡を始めたのは、古いお話しですが昭和23年の暮れ忘年会の席上にて「高砂や」を、聞いてからです。それ以来、中川雄作氏、現うとう会会長新井純先生に稽古をつけていただきました。現在は、四日市工場和友会謡曲部で外部の先生にお願いし、部員一同共に稽古をしている次第です。年一回のうとう会が楽しみです。協和うとう会も成人になりました。今後とも発展し、多くの方々が参加されることを願う次第です。

あさい まさる 浅井勝 (富士工場・観世)



謡との出会いは、ひよんなことだった。会社の同期生が「結婚式にしゃれた謡をひとくさりうなれば、ちったあ男もあがるだろう。一人で習うのは気遅れするのでいっしょにやれや」といわれて「そりゃそうだ、この年でへたな民謡や歌謡曲よりしやれてるな」と思っただけで、誘って貰ったのがそもそものである。同期生は二〜三回鶴亀を習って「こりゃだめだ」とさっさとやめて、誘っても練習に出なくなりました。あとに一人残ったのが今の私である。

(あ 行)

(あ 行)

飯島 仁 司 (四日市工場・観世)



20周年おめでとうございます。昭和35年といえば僕は出雲の保育園で「おうた」を歌っていたころです。そんなところに「うとう会」は発足したんですね。第18回から出席していますがもっぱら写真のお手伝いが専門で、肝心の「うたい」の方は、まだまだ保育園児です。こんな僕ですがどうぞよろしくお願いします。

池田 すすむ (防府工場・観世)



謡曲部に籍を置く事二十数年、石の上にも三年といいますが、その割合には上達せず、会に参加するたび刺激され練習しなければとつくづく感じるのですが、思うにまかせません。でも自分では下手な謡でも充分満足しています。無心でいる時、謡の一節を口ずさむ時気分は最高です。謡以外には、これといった趣味もないので、謡だけは細々でも一生続けて行けたらいいと思います。

池田 まさる (本社・観世)



大きな声を張りあげたいという素朴な欲求にかられ、防府工場謡曲部に入部し、西村先生(本社)の手ほどきをうけたのが、今から二十数年前になります。以後、浅井(四日市)森脇(防府)磯部(大阪)現在の小野の各先生方の熱意溢れるご指導を賜りました。過日、東京周辺在住の防府でご縁のあった新井さんをはじめとする方々と、謡を楽しむ機会を得、懐しさとともに、ご縁の不思議さを感じさせていただきました。

池田 真知子 (土浦工場・観世)



二年前、音痴だと、しがる私に「音痴でも練習を、まじめにすれば大丈夫。謡えるようになります」と富岡工場長は、言われました。ちょっと練習を覗きに行ったその日から、即練習、足の痺れと声を出すのと、初めての本、なぜ覗きになどきたのかと悩みました。それでも少しずつ本が読めるようになってうれしくなりました。最近、練習もサボリがち。一つ上手に謡えるものがあり、だれかさんの結婚式に謡えたらと思っています。

石塚 謙 二 (本社・観世)



四日市工場勤務時(S53~54年)に、山家さんの勧めにより始めました。本社転動後は、他に目を奪われることが多く、スリーパーをきめこんでいますが、何とか名前だけでも会員にしておいていただきたい訳は、必ずや、環境の変化、心境の変化で再開することになるだろうと思っっているからです。湯の山で行われた総会が、唯一出席した総会ですが、非常にいい思い出でした。いつかまた、練習を積んで出たいと思っています。

磯部武夫 (元大阪支社・観世)



私が謡を本格的に習い始めたのは昭和21年二十六歳で大西信久師に師事しました。以来35年になります。大西先生は岩井派の名門で関西の重鎮です。稽古は非常にきびしく素人の差別もなく間違えはいつまでも諷ねられました。能は蟬丸のツレ、班女のシテの二番を舞いました。また同人誌能楽通信を発行し約8年一〇〇号まで続けたりしました。お蔭で観世華雪、梅若万三郎、喜多六平太等故人の能や三老女道成寺等たくさんの方の能を見せてもらいました。

稲留雄一 (本社・観世)



堺工場に勤務していた時、人にすすめられて社友会の謡曲部に入り、約二年間謡曲に親しみましたが、転勤と同時に遠のき、現在は全く活動はしていません。うとう会にはその時一度だけ参加しました。(49年か50年頃、場所は茨木市か吹田市だったと思います。)あまりくわしく知らない時期に参加したので演目を忘れてしまいました。今は当時に買った本を見てはうる覚えでうなる程度です。

今井孝一 (元防府工場・観世)



協和うとう会のみなさんまずお元気で勤めのこととお慶び申し上げます。私が謡曲部にお世話になったのは昭和25年、新井先生、水野さんが初めてでした。その後西村さん、浅井さん、森脇さんに指導を受けました。うとう会には昭和51年、湯の山に参加しました。防府・宇部・門司三工場の合同謡曲会に毎度欠かさず参加させていただきました。謡曲を通じお互いの意志疎通が出来たことを喜んでいきます。今は退職しましたが今後ますますのご発展を祈念いたします。

今田義信 (元防府工場・観世)



昭和30年に防府工場謡曲部員に加えていただいて以来謡歴20数年になります。新井大先生・水野学・西村淳・大坪一弥・浅井昇・森脇亮の各先生方のご熱心なご指導を受けてきました。一向に上達しません。生来の不器用に加えて出たり出なかつたり稽古不熱心さがもたらした当然の結果だといえます。ところが退職して日がたつにつれ奇妙に謡が恋しくなり、現在は「うとう会」を唯一の楽しみにぼつぼつ稽古をしている次第です。

岩瀬厚 (富士工場・観世)



富士観世のメンバーといえはきこえも良いのですが、うとう会では文字通りワキ・ツレ的に末席を汚しております。唸りはじめて5年余、大阪以来良き師に恵まれながら一向に上達の兆しなしですが、うとう会がなくなったら下手なりに淋しく感じるものと思います。世阿弥は「初心に帰れ」といったそうですが僕は帰るも何も常に初心ですから案外永続きするかも知れません。それにワキがいてシテが引き立つのですから。

(あ行)

うんの なおゆき
海野尚幸 (本社・観世)



現在非会員、昔、防府工場時代(昭28)にやったことがある程度のOBです。

おおくさ すすむ
大草進 (東京支社・宝生)



私と謡曲との出会いは昭和45年頃だったと思う。「とにかくデッカイ声を出せばいい。」
と言われ、その気になったのが始まりであるが最初はなかなかその声が出せず苦労した。
うとう会では脚がシビレ、退席する時ひっくり返ったこと、三島の妙法華寺で長さん、小
田さんと共に連吟をしたこと、など数々の思い出がある。今はうとう会を離れて久しいが、
いつの日か本社宝生流が復活するなら、またお世話になりたい気持は十分にある。

おおつばかず
大坪一彌 (富士工場・観世)



S 27年、強引な勧誘が貴重な縁で始めました。初舞台は相知、船弁慶のシテで、静の心
中察し過ぎて声が詰まり、第一回うとう会では、賀茂のシテを力み過ぎて声が出なくなり
慌てたことを、昨日のこのように覚えています。あさば館の野天風呂、半僧坊の杉並木
；等々好印象の思い出は毎回あるのに、自分の出来に満足して帰った覚えはありません。
これが謡を永続させた一因かも知れません。うとう会の末長き発展を祈って止みません。

おおつばえいこ
大坪栄子 (富士工場社員家族・観世)



S 41年ごろ、防府工場の社宅グループで長沼先生に2年位習いました。うとう会は三、
四回見学させていただきましたが、役にしたのは一度大阪で、紅葉狩のシテをやり、普段
全く練習もしていないのに、見物がてらみたいに憶面もなく一夜漬けで参加しましたが、
今は懐しい思い出です。これからも老後の慰めに、少しずつでも習って行こうと思ってい
ます。

おおもりたいりく
大森大陸 (本社・観世)



うたうことは心身の健康のうえに大変有益ですので、今後とも続けさせていただければ
幸いです。

おかだ ひであき
岡田英明(本社・宝生)



おかち りょう
岡地 諒(東京研究所・観世)



おがわ ゆきお
小川幸男(大阪支社・観世)



おちあ いけいこ
落合恵子(東京研究所・宝生)



おばら よしと
小原嘉人(土浦工場・観世)



謡を始めてから得られた知己は、会社の中とは全く違った生活の方々ばかりで、広い世界に接することができる喜びがあります。私の先生は能楽師ですが、世阿弥がそうであったように、芸に対しては一点のごまかしも許さない厳しい姿勢を素人にも貫いてくださり、大変有難いことだと思えます。また芸を通して得た人生観や、芸の解釈などを聞くことができるのも楽しみです。こうしたことや先輩がたのおかげで謡を続けております。

年令的には青年から中年への移行段階にあるが気分的にはまだ思春期のつもりである。うとう会への参加の経験も少なく、これからもいつまで続くかわからないが年に一度皆様に再会できる七夕祭のつもりで続けたいと思えます。どうぞよろしく。

小生昭和40年東研に入社いたしました。当時から謡曲部が盛んで、よく大声で練習しているうたいを聞いたものです。たしか正月には茶道部と合同で行事をやっていた様な記憶があります。あれから15年まさか自分がうとう会に入るなどは夢にも思いませんでしたがやはり年令からくる趣味の変化でしょうか。今年から練習に入りますが、浪曲にならないよう頑張るつもりであります。

その昔、東研でただ一人、勧誘もされず自ら謡曲部にとびこんだ変り者も、今は育児に追われ、練習に参加する暇がないあります。能の静の内にひそむ動に惚れ、謡曲本の字に惚れ……しかし、惚れたにしてはちと思入れが足りない、お叱りの声が聞こえそうだが、まあいつか、復帰出来る日が来ることを願いつつ、子守り歌をうたっている昨今である。

「協和うとう会」に四回参加しましたから、謡曲を始めて四年を経過したことになりました。が、いまだ、一人でできる曲はありませんので、われながらあきれておる次第です。しかし、なにごととも十年といわれております。幸い嫌いでないことでありますから、上達をせせらずに、最低十年間は稽古を続け、一曲でも自分のものにならんと考えております。

(あ 行)

(あ 行)

おもたにゆうじ
面谷 祐二 (土浦工場・観世)



私と謡曲との出会いは、約三十年前のことで、兄が謡曲を始め、家で数名の人を集め先生に習っている時に、調子の良い狸々の一節が聞えて来て今でも耳に残っている。51年、富岡工場長の勧誘があり、以前の印象も手伝って謡曲を始め、現在に至っている。大声を出すことによるストレス解消と同時に内臓への刺激が、私の健康法の一つとなっている。今後も出来る限り続けて行きたい。

かじよしのぶ
鍛治 義延 (東京研究所・宝生)



多くの例がありますが、私も新入社員実習を当時の森研で、しかも高井氏にやっていただいたため謡曲をやることになってしまいました。昭和51年の第15回うとう会(希望荘)から参加しています。また第16回の寒かった三井寺より懇親会の司会のお手伝いをさせていただいております。水原先生にはいつもご迷惑をおかけしていますが、これからもぜひ続けていきたいと思えます。『楽しいうとう会・楽しい懇親会・楽しいお稽古』

かすかわもといち
柏川 元一 (元東京支社・宝生)



前橋工場に在籍している時に民謡グループに入っておりましてので、東研へ来て謡曲部に入りましたが、勧誘なしで入部したのは私位とか。47年1月〜50年末までお世話になり本だけは二十冊を超えました。当時のメンバーは奈良高氏、森泰城氏、寺西氏、森本氏が中心で仕事の多忙な方が多く、私は謡曲の腕は上りませんが、練習の出席率だけは一番だったと自負しております。今でも大阪の舞台は強く印象に残っております。

かとうしちや
加藤 七弥 (元宇部工場・観世)



あれから三年たちました。一九七八年一月本来なら謡とも縁がきれるところですが、場内の下請企業につとめている関係でOBとして声をかけられ、ほんとうにありがたいことです。それにしてもズーッと以前から指導して下さった吉井先生が亡くなられて以来、空白がつき練習どころか、三年間はまるでうたつてない状態です。時折テレビカラジオの番組で精進?をしているのがたのしみです。今後ともご指導くださいませ。

かつまたきくえ
勝 又菊枝 (富士工場元社員家族・宝生)



協和うとう会20周年記念おめでとうございます。うとう会のお仲間に入れていただきまして十四年目を迎えました。伝統あるこの会の一人に加えさせていただき誠にうれしく存じます。十四年にも成りますのに、年のせいか、頭のヨワイせいか、一向に上達しないのが残念です。今後の発展をお祈りいたします。

かねだ
金田 夕力枝 (元富士工場・宝生)



謡は音痴の方でもできますとの誘い言葉にわれもかえりみず入会しました。綱代荘のうとう会に緊張をやらげられるために精神安定剤をのみましたが、いざ本番の時になって眠くなって、眼が開けられず、うとうとしながらの三十分。こんな思いもあります。

(か行)

上條 佑蔵 (名古屋支社・観世)



五十四年四月に本社から名古屋支社に転勤し、それ以後、謡う機会がないまま今日に至ってしまいました。富士工場・本社で通算約四年間、謡のイロハを教えていた大きながら、現在は元の木阿弥といったところです。勿論今でも謡本にカビが生えないよう(?)取り出すことはあるのですが、どうも気合が入りません。いつの日か、うとう会にカムバック出来ることを願っております。

川合 正允 (東京研究所・宝生)



心ならずも謡を始めてはや7年になります。「謡は2・3年ワラジを履いた方が上手くなる」と言う説があり、私もここ2年ばかり「うとう会」に欠席していますが、ますます下手になりました。生来音痴ですので、技術的に上達することはあり得ませんが、それなりに謡の心がわかれば良いと、ちょっと恰好をつけています。しかし「わかる」には心の中で発酵する時間が必要です。何時になりますことやら。

川崎 資定 (元堺工場・観世)



私が謡を始めたのは昭和41年頃の堺工場勤務中であつたと思います。あの当時ストレスも充満し何か無性に叫びたい衝動にかられ調子はずれの大声でうなったのが最初だったことを思い出します。爾来少しも上達せず相変らずの大声であるがいくら興味も覚えおもわず口ずさみ自己満足しているのが現状です。これからも私の一生続く限り皆様と一緒にうたいたいと思います。どうか御指導の程お願いします。

川村 實 (元本社・観世)



私はS22年協和醗酵に入社S52年6月に定年退職するまで三十年間化学品・医薬品・食品と営業畑を歩んで来ました。大した趣味もなくこれから何かを思っていた所に故中島義照さんから本社の謡曲部に入ることをすすめられ現在に至っています。勤務先が丸ビルなので月三回の稽古日も割とこなしで頑張っております。今後ともいつまでも続けてゆく心づもりであります。同好の皆様は温い強力なご指導とご支援をお願い申し上げます。

河本 太 (本社・観世)



かわもりみき
河盛幹雄 (東京研究所・宝生)



入社四年目、謡歴?年目(未だ全く上達が見られず)、東京研究所に人知れず棲息する。宝生流のイロハも知るに至らぬうちに、観世流の妻をめぐり、ますます混乱を来たす。能舞台は夢としても、友人や後輩の結婚披露宴でなんとか謡いを余興でやれるようになるまではがんばってみたい。

きくもりえつぞう
菊守悦三 (大阪支社・観世)



33年大阪事務所酒類課入社を振り出しに、大阪支社特薬課(畜産)、九州支社特薬課を経て、現在、大阪支社特薬業務課に在籍しています。

趣味は特にありませんが、強いていえば、ヘボ将棋くらいしかなく、他に麻雀も少しやりましたが、厄年を機会に何か変身を考えていた矢先に、松井総務課長から誘惑されたのに悪のりして、身の程も知らずに本年一月から入会させていただきました。

きしだぐんじ
岸田軍二 (防府工場・観世)



謡い始めて十五年、ささやかでも私の財産の一つにしたいと考えています。

きたにまさあつ
木谷正敦 (元堺工場・観世)



44年堺工場に転勤すると、川崎さんから業務と一緒に同氏の入っていた社友会の部まで全部引継ぐことになり、永らく中断していた謡を習った。「うとう会」にもお世話になった。持ち時間が短すぎると言ったら、新井さんが持ち分を提供してくださって恐縮したが、終って地頭の磯部さんから大分旨くなったと賞められてうれしかった。堺を出てからまたやめてしまったが、今の仕事を退いたら家内と二人で謡おうかと思っている。

きのしたとしこ
木下登志子 (元富士工場・宝生)



私と、謡曲との出会いは、ちょうど、二十年前に遡ります。謡曲を楽しむためには、まず、良い師匠に恵まれること、第二に、愛好者同志のサークル活動があり、発表の場があること、そして、困りの人々や、家族の理解を得られること、等があげられます。私が、富士工場に入社した時、このような条件に、すべて恵まれました。結婚退職後は、中断したまま、現在に至っております。折あらば、復活したいと、秘かに思っております。今後ともよろしく願います。

(か行)

木村 一雄 (防府工場・観世)



うとう会には第七回から参加した。東研在勤時のことであり八倉巻先輩や岡地氏の強い勧誘に感謝している。その後、野口氏、志村氏、故中島氏も加わり、岡地氏を師に楽しいお稽古をしたことが忘れられない。随分と我ままな生徒であったのによく面倒を見て頂いた岡地先生には有難い思いで一杯である。防府工場に来てからまだ日も浅いが、森脇先生を始めうとう会で知り得たお顔も多く、気持のなごむ環境であることを有難く思っている。

久代 浩徳 (本社・観世)



語にまだまだ感動を覚えることのできぬ一人である。好天下の「うとう会」の時など、ゴルフに行けたらな、と空を見上げてしまう。それにしても毎年の「協和うとう会」は一つの励みである。教えて下さる先生も、みっともないことはさせられぬと思われてか、力が入る。教わる方も真面目に受ざるを得なくなる。私としては六十歳から始めてもよいと思うのだが、せっかく誘いもあったことから、少しでも積み重ねて行きたい。

久保 伸篤 (宇部工場・観世)



子供らが長じてくると、文学的センスがないとか、日本の古典に暗いという声が耳に痛い。そういうえば戦後間もなく、新鮮な響きをもった社会科学の本ばかりを読み、洋楽に溺れた学生時代を思い出す。初めて参加した湯の山の協和うとう会での驚きを忘れない。宝生はまるでフェル・カントだと感じた。子供らに負けまいと始めた謡曲が、家で、ガキどものバイオリンやピアノの音にかき消されるのを悔む。

古賀 源太郎 (東京支社・観世)



本社医薬業務部在勤時に、本社観世流の末席を汚ささせていただいておりましたが、昭和50年5月群馬県担当プロパーとして、転勤以来全然謡の方はお休みをしております。あの時皆様と稽古をしていたころは、あまり、身を入れて稽古をしておりませんでしたので、暗記している個所もなく、今、風呂に入った時など鼻唄に出てくるほど一所懸命やっておけばよかったですと悔んでおります。

古賀 勇治 (防府工場・観世)



謡曲の習い始めは、昭和43年7月5日に協和謡曲部入部、今井孝一、伊藤隆治、森脇亮先生に師事、現在に至る。仕舞は昭和44年9月から約三年間、藤井栄子先生に習った。それ以後全くやっていない。最近、いろいろ都合があり、謡曲もサボリ気味でふまじめになっ

こぐれまさすけ
木暮正祐 (土浦工場・観世)



謡曲は決して年寄りだけの専有物ではないことがよくわかりました。また一曲のなかに七五調の部分が数多くあり、リズム感も最高です。今後、土浦工場の謡曲班の第一期生として、自信と誇りをもって練習に参加したいと思えますので、どうかよろしくご指導をおねがいいたします。

こやま しづり
小やしづり (東京研究所・宝生)



京都洛西、雨林院の近くに生まれ育ち、俊寛の鹿ヶ谷山荘の麓で中学、高校生活をすごす。真間手児奈も締めたという倭文織帯に因み名付けられたにもかかわらず、故郷をはるかにいまだ砧の地に独居する。提琴なるものを友とし、西洋音楽の愛好者ではあるが、生地京都を想い、心のふるさとを求め、高吟することもある。

こやまたけひこ
小や武彦 (元防府工場・観世)



現在、千代田運輸機勤務
うとう会に参加させていただいたのは昭和48年秋静岡県の半増坊において開催の第12回目で防府工場からは岸田さんと二人の初参加であったと思います。うとう会の今後の益々発展充実をお祈りいたします。

こんどう あきら
近藤明 (富士工場・宝生)



謡を始めたのは昭和45年だからもう十年になる。アメリカに出張した時、むこうの技術者から、「ノースングについて何か一言」との質問があった。「ノースング」が謡であることを知ったのは、相当、いろいろなやりとりがあった後であった。帰国したら「ノースング」をやらうと考えた。あれから十年たった。でも彼の地の技術者の質問に対する答えは未だ用意できないでいる。

(か行)

さいとうひろゆき
齋藤弘之(元大阪支社・観世)



嵐山渡月橋北詰より左岸をほんの少し上った「局茶屋」の奥に小督局の塚があるが案外人に知られていない。注連縄を張った枯古木の傍の自然石が詣でる人も少ないまま今静かに眠って居る。私は之迄小督の役を何度も貰って居るからかこの慎しやかな悲恋の佳人に何か惹かれるものを感じている。松風に乗って法輪寺迄届いた琴の音の何と美しい調べであったことか。今傍の床几ではその昔を知る由もない若い女性達が屈託のない笑声と共に名物のしるこに舌鼓を打って居る。

さくむらたけを
作村武夫(元四日市工場・観世)



さいよしはる
笹井義晴(防府工場・観世)



うとう会参加は第17回、湯の山の山荘で開かれた時が最初で、以来連続出席しております。「謡曲」も知らずにただ森脇先生の教えられる通りに「うなる」だけでまだ恥ずかしさも分からないほどの未熟者ですが他の誘惑にも屈せず練習に精進したいと考えています。協和うとう会がこれからも益々繁栄し、伝統ある行事に発展してもらいたいものです。

ささき じろう
佐々木二郎(盛岡出張所・観世)



昭和51年8月、盛岡工場休止により、土浦工場へ転勤となり、富岡工場長のおすめにより始めました。老年になり麻雀、碁、将棋のみの趣味では何か物さびしく感じ、勉強させていただきましたが、土浦工場一年で盛岡へ再度転勤となり、現在中断しておりますが、時々富岡先生のテープを聞いては早く盛岡で立派な先生について続けたいと念じております。そして早く「ハカマ」を着て謡えるようになりたいものです。

さとうこうじ
佐藤恒治(四日市工場・観世)



私と謡曲の出合いは、富岡(土浦工場長)さん、水野(昭永工業)さん、の勧めによるもので、鶴亀の稽古からはや七年になりますが、つい昨日のように思われます。うとう会では、同好の皆さんと毎年会うことができ、謡曲を通してコミュニケーションがはかられ、オール協和の年間行事としてますます発展させるべく勉強してゆきたいと思っています。

佐藤 護 (堺工場・観世)



さめじまひろとし
鮫島 廣年 (本社・宝生)



さわのただお
澤野 忠男 (防府工場・観世)



さわもとかずまさ
沢本 和容 (名古屋支社・観世)



しげたけいこ
重田 恵子 (家族・元防府工場・観世)



現在堺工場研究室に勤務しております。協和とう会には四日市湯の山での第15回以来、昨年の第19回目で二回参加したことになります。思えば私が謡を始めてから六年程になるわけで、その割には全く進歩していないことを今さらながら痛感するところです。昨年のとう会で皆様の熱演を目の当りにして「よし、明日からはまじめに練習しよう」という一念を強くした次第です。未長く謡を続けていきたいと考えております。

謡曲を始めたのは昭和33年、私の東京研究所時代で、水原一瓢先生の下に研究所諸兄が宝生流グループを作ったのが初めである。以来人の出入も多く、当初から続いているのは私一人かも知れない。とはいえ非才かつ怠慢のため、後進の人々が続々と追い抜いてゆく。それでも会があるとあつかましくも一夜づつで出席して皆様に迷惑をかけているのは、何かひかれるものがあるからだろう。何とぞご寛容をお願いする次第です。

忙中、閑有り。壺中、天有り。
未長く練習にはげみたい。

本社在籍中、安島氏の紹介ではじめた「謡」も、東京支社、名古屋支社と転動するうち遠いものとなってしまいました。時々社内報などで「とう会」の記事に目を通す昨今です。かく言う私ですが、「とう会」には過去一回しか出席した記憶しかありません。今考えると「謡」の心がわからず終わってしまい、先生には申しわけないと思っております。最後になりましたが、今後の「協和とう会」のますますの活躍を期待しております。

48年に防府工場入社して三年後、謡曲部に入部し、とう会に参加させていただいたのが二回。三井寺で松風を舞わせていただいた事が忘れられません。足腰のたたぬほど練習した事、裾を踏み、ころびそうになったのをそれとはなしにごまかした事、今から三年前の事でしょうか。今は一歳のいたずら坊主を相手に足腰のたたないほどの毎日。また何時の日にか仕舞や謡が出来たらと楽しみに、西宮の協和社宅で暮しております。

しまもり とみよ
島 森 登美代 (富士工場社外・宝生)



気分転換に何かと考えてた時、必要に迫られ塚谷さんの奥様のご紹介で高橋先生に謡曲のお稽古をお願いしてから早十余年、一向に上達の気配のない不肖な弟子でございます。七夕のように年に一度のうとう会の集い。皆様にお目にかかり素晴らしい謡、仕舞等のご披露を楽しみにいたしております。今後のうとう会のご発展をお祈りいたします。

しむら げん
志 村 元 (防府工場・観世)



謡えばよい、声を出せばよい、そう思いつつ、もう少し落ち着いた気持になれば本を開く気になるだろう、などと思っているうちに何年も経ってしまいました。練習しないのですから上手になるわけがありません。これからはいくらせわしくても落ち着く為に声を出すよう心がけたいと思っています。

すが や
菅 谷 亨 (四日市工場・観世)



私が謡曲を始めてからは正月に家族で「うとう会」をやっています。父は宝生、母と私が観世、祖父が金春で、父を除いては自信なく手元の本を勧められるままにうたっています。実家が奈良の田舎で静かですから、おいしいお菓子でもあれば最高です。今年万里の長城で初日を迎えたため、「うとう会」はできませんでしたが、赤茶けた大地とかなたに雪をいただいで連なる山々をみながら、故郷の正月を思い感慨深い時を過しました。

すが と
菅 善 人 (本社・観世)



すず き まさなお
鈴 木 正 直 (元本社・観世)



はじめてうとう会に出席したのは昭和43年10月、湯ノ山の四日市倉庫の寮においてであった。気が弱くて前夜祭は敬遠して出なかった。はじめて声を出させて貰ったのは翌年網代荘であった。予定の人が来なくなったので葵上のワキツレをやれといわれた。以来毎年参加して一昨年赤とんぼ荘では葵上のツレをうたった。ワキツレからツレまで「この間十年相経ち申候」となる。昨年は欠席、今年はずいぶん出席させていたが思っている。

鈴木正美 (富士工場・宝生)



富士工場製造部に属し医薬品の製造を担当しております。謡を始めたのは49年ごろでもう七年近くになるうとしています。特にこれといった動機はありませんが何となく始め宝生高橋先生に教えを受けている身です。三島の命尾先生に大鼓を習ったこともあります。他にスポーツをしたり釣をしたりで謡の練習をぬけることもあります。今後とも頑張ろうと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

須藤恵紀 (土浦工場・観世)



うとう会二年生、職場の大先輩に誘われて、ことわり切れずに生返事。ノコノコついていったがことの始まり。積極的に好んではなかったが、また積極的に嫌でもなかったようだ。最近、日向を探しての昼下がり、時々、唸りをしているが、子供曰く「道行く人の迷惑よ。」

たかいはるき
高井春樹 (東京研究所・宝生)



謡曲は入社して東研に配属された昭和45年から始めました。私が配属になった部屋の上司が森泰城氏で、その年、休部同然となっていた東研謡曲部を再開しようとの同氏の働きかけで私も謡曲部へ誘われたのがきっかけだったと思います。水原先生の美声に感嘆したものの何を言われているかちんぷんかんぷんのまま、とにかく練習に参加しているうちに今年で十二年目になりました。ほそぼそながらも続けてゆきたいと思う現在です。

たがやかずお
多賀谷和夫 (防府工場・観世)



私の謡いはじめは、昭和30年九州福岡の瀬高工場に入社後間もなく、喜多流で、竹生鳥、羽衣、鞍馬天狗を習った(山門郡地方は喜多流がさかん)。昭和31年山口県防府工場に転勤。観世流に転向。以来二十有余年。私は演劇の方も謡曲と並行してやっているが、序破急の劇構成、舞台装置の簡素で象徴的な美しさで見せる能。囃子、地謡のバックコーラス、つまり謡曲のすばらしさは、完成された演劇そのものである。一生続けていく。

たかのまさこ
高野正子 (東京研究所・宝生)



短大一年の秋から始めてる割には、やったり、やめたりの繰り返して、一向に進歩がないのが現状です。ホントは好きなんですしょうが、なぜか普段は素直になれません。だけど、このごろは、練習した自分の声をテープで再生してみても、つくづく基本は、大事だと痛感しています。今年からは、避けることなく、根気よく続けたいと思っています。

たかはしえいち
高橋栄一 (本社・観世)



宇部工場の独身時代から教えて七年を数えました。途中休学もありましたが、今年は、新たな意気に燃えています。呑気な謡曲を心情にこれからも未長く大切にしていきたいと思えます。

たかはしよしお
高橋孝夫 (元富士工場・宝生)



昭和35年に熱海荘で十数名の参加者により発足した「協和うとう会」が20周年を迎えることになり、心からご同慶に存じます。当時、会のお世話をした一人として非常に感慨深いものを感じます。幸い、よき後継者により参加者も百人にならんとしているのでお世話をする方々のご苦勞も大変だと思えますが、ますます発展されることを心から祈っています。

たかはしじゅんこ
高橋純子 (富士工場元社員家族・宝生)



うとう会も20周年を迎えるとのこと、おめでとうございます。私が参加させて頂いたのは二回目位から十回程でしたが、当時は熱海、網代、三島、浜松、浜名湖等々、会場は静岡県のみでしたが最近では四日市、大阪、そして今回は東京、そして防府からも土浦からも参加され八十名に達するとのこと、ますます盛んになることを祈ります。

たかやまけんいちろう
高山健一郎 (東京研究所・宝生)



「ずうずうしくて助べえなのはうまくなる」というのは水原師の口癖で、ずうずうしくなろうと謡を始めたが、上達しないのは謡曲第一としないことに加えて、ずうずうしくなっていないことと関連があるようだ。土蜘蛛の頼光でデビュー。横で口まねをしていた二歳だった娘が高校二年生になっている。だが、練習が終わった後の爽快な満足感は何もいわず。結婚式では「げに様々の……」のワン・パターンで重宝しています。

たかやまみつえ
高山美津江 (防府工場・観世)



「へえー謡を習っているの。ババくさい」と言われながらも、「このバカノ楽しいこともしらないくせに」と思いながら、ひそかに週一回の稽古を楽しんだ一年。最初は楽しくて帰ってはうなり、トイレに入ってはうなり、家族からは、お経だと言われても笑っていた。しかし、結婚したことで、当分は休んでいる私。自分の生活の中にキラリと光る何かを見い出せるよう。謡も私の趣味の一つとしたいと思っている今日このごろ。

たけばやしみのる
竹林実 (防府工場・観世)



入部してはや五年目になります。最初に協和うとう会に参加したのが三井寺です。その時の会場のすばらしさと会のムードに悪酔いしてそれ以後毎回出席させていたいただいておられます。日頃の練習不足がたたり皆様には大変お聞き苦しいかと思えます。また、森脇先生には大変ご迷惑をおかけしておりますが自分なりに細く長くをモットーにガンバルつもりです。協和うとう会のみならずの発展を心から祈っています。

たつみしゅんいち
巽俊一 (土浦工場・観世)



うとう会へは三井寺大会以降参加しております。謡曲を謡う楽しみ、聞く楽しみをじっくりと味わいたいと思っています。

(た 行)

たてばやしてつ
立林 鉄也 (富士工場・観世)



昭和47年7月から、観世II大坪一弥様より指導を受け現在に至る。持ち前の大声で怒鳴るが、音調、発声法に興味なし。健康法の一策として永続したい。

たなか ひとし
田中 均 (大阪支社・観世)



生まれて初めての経験をすることになりました。伝統ある会の一員となったことをよろこんでいます。スピード化の進む中で伝統の、間、テンポを少しでも見つけられればと思っています。一步一步進歩する様努力したいと考えていますのでよろしく願います。

たなべひろあき
田辺 博章 (東京支社・観世)



観世飲兵衛の歌一首
うたいける後はみんなで大酒宴 はげしかったと毎年思ふが……
また翌年も参加したくなって、昭和52年から毎年うとう会に顔を出させていたいただいており
ます。最近では、自宅で練習をしていると、3歳になる娘が「ヨーポーン」と合いの手を
入れてくれるようになりました。

つかたのりこ
塚谷 則子 (富士工場元社員家族・宝生)



あれは今から何年位前になりますか。小上さんの奥様と二人高橋さん宅に押しかけ高橋
様の奥さんと三人ご主人にお習いすることになりましたが暑い日は冷たい飲物を、寒い夜
は温かいおしるこ等今思うと本当に迷惑おかけしたものです。いろいろお世話になりま
した。私達の初舞台はたしか熱海荘でした。忘れもしません夏の暑い日で汗をふきながら
坂をのぼりやとたどり着いたらもう会が始まっていてすっかり上ってしまったことを……

つじむらひでかず
辻村 秀員 (堺工場・観世)



私が謡曲を始めたのは、入社した年に、クラブの人から「音痴にもできる」と誘われて
からでもう十数年になります。最初は、もの珍しさもあり週一回の練習にもまじめに参加
していたのですが、やはり音痴ではダメだと悟り、練習から遠のき最近ではほとんど謡う
こともなくなりました。しかし謡を聞くことは好きでよくテレビ、ラジオ等で聞いて楽し
んでいます。一度機会があればうとう会に聞きに行きたいと思っています。

つるぎ しんいち
鶴来伸一（本社・観世）



てらにし まさゆき
寺西正行（東京研究所・宝生）



どう おひでとも
堂尾秀友（防府工場・観世）



とみ おかけいたろう
富岡啓太郎（東京支社・観世）



昭和52年から謡を始めました。自ら好んでというより、強い強い勧誘でひきづりこまれたという感じです。不勉強なので一流といわれる玄人の謡曲を、今までなまで聞いたことはありません。しかし三井寺のうとう会で聞いた「隅田川」は素晴らしいものでした。アマチュアでもこのような感動を与える謡曲というものは、何かあるのだらうと思いい、今でもぼつりぼつりとならわしていただいている次第です。

「協和うとう会」発足20年を迎え、心からお祝い申し上げます。今後とも、老若男女、上手、下手も参加し楽しむ事の出来るこの会の末永く続く事を心から祈ります。私自身は謡曲を始めて、年数だけは十数年たちますが、この会への参加を第一義とし、参加すると来年こそはと心を新たにすると同時に反省している次第。20年を機会に「一念発起」？乞うご期待。

昭和28年頃防府工場謡曲部に入り、浅井昇氏に師事し、氏が四日市工場転勤された後、今日まで森脇先生のご指導をうけてきました。上達も一人一倍遅いにもかかわらず、人間味と熱意のあふれたご指導を頂き衷心より感謝致しています。私は細く長く稽古を継続し謡曲を通して得た宗教的な人生観をもって退職後も有意義な人生を過すよう努めてゆく所存です。謡曲部の発展を祈り皆様方のお心遣いに感謝いたします。

生涯の趣味として謡を選んだことは私にとって幸いだったと思います。謡をより深く楽しむためには、やはり仕舞、四拍子に対する理解を深めることーサラリーマンには自ら限界がありますが。私の謡歴。謡ー昭和22年より渋谷、田所利朗、新井純、熊沢章各師。仕舞ー田所、梶山秀子、津田康由師。大鼓ー片山弥喜知、命尾静子、福井啓次郎師。いろいろ習いましたが謡が一番むづかしいですね。素人は謡に始まり結局謡に帰着するのではないのでしょうか。

なかがわとしお
中川年男 (元本社・観世)



私は昨年4月本社「観世」の勉強会に入会しました。実は40年まだ本社在職中に水原さんをお願いして「宝生」の会で手ほどきを得たのがそもも謡への第一歩です。ところが水原さんの熱烈なご指導とは逆に次第次第にすりすぼみになり、遂に中断するという不まじめな会員でした。昨年2月千代田開発を退任したのを機に思いを新たに、特に新井会長のお勧めもあり「観世」に変わったのですが、今でも水原さんに申し訳ないと思っております。ひたすら精進するのみ。

なかはらひろあき
中原博明 (防府工場・観世)



うとう会も、三回の参加を数えます。今後も、いにしえの人の心、風情等を大切に、うたい続けたいと思います。

なかむらしんいち
中村眞一 (堺工場・観世)



謡曲部に入部して以来、はや10年が過ぎさうとしています。入部当初は毎週練習に通い、「狸々」「竹生島」「小袖曾我」等の指導を受けたこと、また、発表会の舞台で冷汗を流したことなどが、今では楽しく思い出されます。最近では謡曲に対する興味も薄れ、練習にも足が遠のきがちですが、今年で「うとう会」も20周年を迎えることでもあり、これを機に、謡曲の練習に励み、永く続けていきたいと考えています。

なかむらかずこ
中村和子 (四日市工場元社員家族・観世)



謡曲部に籍をおいて頂いたのは、ほんの二、三年で、会員とは名のみでございました。現在はおけいこもせずにおりますが、機会があれば、もう一度と思っております。臆下丹田の発声は、ほんとうに気持ち良いものでございます。

ながいみえこ
永井三重子 (家族・元富士工場・宝生)



昭和36年富士工場に入社し、当時製剤課長であられた高橋先生に声をかけていただいたことが、私と謡曲とののであいでした。最初の一年間は、ふき出し笑いばかりの不良生徒でした。でも、水明荘、熱海荘、佐野邸と、うとう会を経験させていただき、とても良い思い出です。長男(中二)一七〇cm。長女(小五)一六一cm、私一五二cm。家族にやさしく、いたわられている現在、もう一度、お腹の底から声を出し、謡ってみたい心境です。

ながくらひさ子 (富士工場・宝生)



奈良高 (本社・宝生)



やじ馬というか、それとも好奇心が旺盛なのか、すぐに手を出す性格のため、ちょっとだけ始めてはや十年。素語だけでなく、小鼓、仕舞にまで手を出し、仕舞だけはもうお仕舞となってしまうが。初舞台は11回目の玉沢、それ以後毎回出席はしているが、一向に上達する気配もなく、現在に至っている。でもへたはへたなりにこれからも続けていこうと思っっています。

本社に来てから練習はさぼり通し。ギブ・アップはしていないつもりゆえ、今後もよろしく願っています。

にしむらあつし (本社・観世)



住時茫々、熱海荘での初会合も遙か夢のかなたとなった。仕事との兼ね合いで謡曲や仕舞、小鼓の稽古も昭和32年富士工場への転勤を機に中止して以来二十二年間サボったままであったが、大病を得てから心境が変化し昭和51年秋から謡のみ再開するに至った。始めてからは昔以上に面白く、住む町に会を組織したり、都内の各会に参加したり、多くの書籍を買い集めたりでここ数年没頭したが、これからも永く皆様とともに楽しみたい。

にしむらみち子 (本社社員家族・観世)



私が初めて謡を耳にしましたのは、四、五歳の頃からで、また習い始めたのは京都の学校の時でした。結婚し、協和の一員になりましたからは、ブランクばかりで、学生のころから考えると少しも進歩していない私でございます。うとう会20周年、この会と共に生まれ、今年成人式を迎えた長女を思います時、月日の早いことに感無量な気がいたします。何時も和氣霽々とした楽しいうとう会を、未長く続けていただきますようご発展をお祈りいたします。

にしやすみこ (本社社員家族・観世)



昭和39年ころのことでしょうか、熱海で会がありました時、西村道子様からお誘いを受け、何気なく参りましたのが私の「うとう会」とのかかわりの始まりでした。富士工場で、高橋先生にお謡の手ほどきを受け、その後主人の転勤で防府でも社宅の奥様方と御一緒に致しました。それから数年お謡とは縁遠くになっていましたが、この程、会にお誘いをいただきますして楽しく参観させていただいております。

野のぐちえい お 男 (塚工場・観世)



私と謡曲との出会いは昭和23、24年頃だったと記憶しています。門司工場で出来たばかりの謡曲部に入部したのがきっかけです。その後大阪工場へ転勤となり約10キロ程の道を自転車で習いに通ったのが今さらのように思い出されます。うとう会に初めて参加させていただき、それが第7回うとう会ではなかったかと思えます。現在は塚工場謡曲部の一員として福島得先生に師事しご指導をいただいております。

野のぐちさだ お 夫 (防府工場・観世)



ここ4年ほど、すっかりご無沙汰で、申し訳ない次第です。謡い方も忘れかけており、岡地先生にも合わす顔がないような状態にあります。また、いつの日か、お仲間に加えて頂けるよう、その気持だけは持ち続けております。よろしく願います。

埜のぐち のぼる 登 (土浦工場・観世)



私は、謡を始めて三年になります。謡をする動機は、お師匠様(富岡工場長)に誘われたのが、きっかけです。また、自分もお祝い等の席で高砂くらいは、できるようになりたいたいと思っただけです。富岡道場に入門しました。だが、聞くことと、謡うことでは大違いで、今は大変苦労しております。早く楽しみながら謡が出来るとなりたいと考えております。

野のむらただ あき 村 忠 亮 (本社・観世)



昭和53年3月24日の安島さんの筆による謡曲部員あて通知により、当時医薬営業部の八尾さんと小生が入部、先発組もこれを刺激に発音してくださいます。以後80名くらいははじめに稽古に出席し、うとう会にも二度(赤とんぼ荘、可眠斎)出席させていただきました。謡はむつかしくて苦しいものですが、年に一度の旅行を楽しみにこれからも続けていきたいと思っております。

馬場 国男 (元土浦工場・観世)



現在広島山奥にて、一人暮し。うなる機会ゼロなるも、いつの日にか、また縁あらんと折角ヤッサンが送ってくれたからと思つて、返信をしたためた次第。

馬場 治次 (富士工場・宝生)



「能」「謡曲」というものを、祝日等のテレビ、ラジオで何となく見たり聞いたりして、判らないなりに「古き良きもの」と思っていたが、工場の広報誌上で高橋師の、「うたい十徳」という謡曲部の紹介をかねた所感文を読み、急に身近に感じられ、私にもできるものかどうか、おそろおそろ門をたたいて、以来十五年になりました。良き師、良き先輩の方々や同僚の人達とともに、これからも道を楽しみたいと思つています。

林 峰之 (東京研究所・観世)



今まで「うとう会」には三回出席させていただいてますが、謡いの実力の方は少しも進歩なく(練習をしないのですから当然のことですが)、いたずらに参加回数のみを増やしているのが実情です。この調子でいつまで続けるのやら、自分自身でも見当が付きませんが、偶然の一致か、謡曲を始めてから不調だった胃腸の調子が良く、ここに何かの因縁を感じ今の所止めるに止められない所。

平尾 学 (堺工場・宝生)



謡の事始めはS46年までまだ10年程の新参者です。この間約60曲を習い、うとう会には11回から8回出席しています。堺工場へ転勤以来テレビ、ラジオ、観能会を通じ専ら自習(テープレコーダの利用)です。笛の方はS48年奥山半曾坊(第12回)の折、早朝山の中から聞えてきた緑君の笛の音に魅せられ森田流を習い始めました。現在野口浩和先生の門下生(堺能楽堂)です。ぜひ堺工場でも囃子が盛んになってほしいものです。

福井 清史 (堺工場・観世)



うとう会には第7回から四回参加させてもらっています。謡は、堺工場の謡曲部発足以来の福島得先生(女性、八十歳)に習っています。毎週木曜日が練習日ですが、出席は六カ月に二、三回の劣等門下生です。うとう会20周年を節として心機一転優等門下生になればと思っています。

(は行)

藤井 武夫 (本社・観世)



S 47年本社謡曲部へ入部し、磯部先生のご指導を受け足掛け10年目。現在は小野先生です。日頃の練習は欠席がちで、「うとう会」には未熟のまま参加していますので、先生には申しわけなく毎回反省しています。最近に入部者が多くなり、本社観世の中でも古参になってきたので、今年マジメに出席しようと思っています。

藤井 美代子 (元防府工場・観世)



定年後もいろいろ行事にお誘いいただいて、大変喜んでおります。時間があれば永久におけいこをしたいと、思っているのですが、思う様になりません。今後もし宜しくお願ひ申上げます。

藤井 祥孝 (防府工場・観世)



森脇先生に師事して、四年近くなります。今一番苦手なことは、なんといってもコンスタントに練習に出ることです。(先生は、読まないでください。)したがって、まだ、正座が不得手です。謡がうまくならないのは、諦めの境地に入っており、余り苦になりませんが、正座を長く続けることは、とてもガマンできません。今後は、せめて正座くらい人並みにできるようガンバリたいと思います。

藤沢 佐都子 (宇部工場・観世)



遠路の寝台車を降りバスは走る館山寺庄へ。協和油化坂口様の紹介での初参加は草子洗を女子四名で謡いました。その春富士電機へ入社した次男が横浜から面会に参り皆様のご好意で懇親会に加えて頂きうとう会ならではの自己紹介山海の珍味と感激しました。翌日の打上も素晴らしく次回への高まりも印象深いものでした。上京し大学一年の長女と三人夕食も嬉しく後仙台会津と旅し連山紅葉の錦を味わうことができたのも、うとう会のお陰です。

藤田 良輔 (本社・観世)



大声を出しストレス解消にと、軽い気持ちで始めた謡曲ですが、その年館山寺での「うとう会」でいきなり紅葉狩のシテをやらされました。これが私と「うとう会」との出会いです。あれからあっとい間に六年がたっていました。毎週一度の稽古も出たり出なかつたり、いつの間にか本も一冊また一冊と増えてきました。時折出かける能楽堂での能の鑑賞など、ようやく謡の楽しさ、むづかしさがわかりかけて来た今日このごろです。

藤原 みよこ
(富士工場・宝生)



富士工場、製品課勤務、始めた動機は、職場の人に誘われて聞きに行ったのがきっかけです。これからも、続けていきたいと思っています。(旧姓飯島)

古川 忠康
(東京研究所・観世)



その昔、謡曲部のあの独特の雰囲気から謡とは徒党を組んでやるものとはばかり思っていた。今日、残念ながら「謡曲が趣味」と言えるまでには成長していない。しかし、さ程大きな苦痛もなく聴けるようになってきたし、少しはおもしろくなってきたことも確かである。数学者岡潔曰く「何でも極端にやれば必ず好きになる」、今年から徹底的に練習しようかと思う。しかし、「好きなことに三日坊主はない」という人もいる。これもまた名言。

保利 静人
(堺工場・観世)



堺工場総務課守衛勤務しております。勤務の都合上十年以上も練習をやめておりますが、各氏よりまた練習を始めるように誘われたこともありです。けれども考えております。

町田 玲子 (元東京研究所・宝生)



47年、48年の二回、うとう会に参加いたしました。東研宝生流謡曲部で、おけいこは二年位したのでしょうか。結婚のため、少々かじった程度で、全くおうたいから離れてしまいました。現在、子供が五歳と三歳。将来、私の時間が持てるようになったとき、謡曲を鑑賞するにせよ、自分でうたうにせよ、二年間のおけいこが、とても役に立つと思っております。(旧姓清水)

松井 信行 (大阪支社・観世)



うとう会には48年9月の第12回から参加していますが、どちらかと言えば飲みこ要員を自認し、会の雰囲気にはひかれて続いていると言った方が正しく、回を重ねる割には謡の方は今一つ……と言ったところです。昨年8月に大阪支社に移りましたが、磯部武夫、斉藤弘之両先輩の激励をいただいで、年末に支社の有志の方々と謡曲同好会が発足しました。磯部先生のもと、記念すべき第20回うとう会参加を目指していますので、よろしく。

松尾 英毅 (土浦工場・宝生)



突然の原稿依頼にびっくりしています。はたして小生に、この原稿を書く資格があるだろうかと疑問に思っている次第です。S49年4月、東研より味日本(広島)に出向になって以来、謡曲ともご無沙汰しているからです。現在は、テレビの番組で時々、謡を聴くのみになりました。

松崎 勝正 (防府工場・観世)



山口に生まれ山口に育つ長周男児。謡曲部に入って二年となるが、入門コースがなかなかクリアできない。54年兵庫県姫路の第18回うとう会に参加の機会を得て約八十名の方々の熱心な発表を聞いて感激した。初公開の「橋弁慶」でトモをやり冷や汗をかいたことは忘れられぬ。また労組の執行部時代お世話になった方々と再びうとう会で一緒に話すことができた。四十歳までは人前で披露しないつもりであったがすでに二度も!

松崎 充 (宇部工場・観世)



なんの芸もない私に先輩から謡はどうかと勧められて謡曲部に入会しました。うとう会には二回(湯の山、三井寺)参加させていただきましたがその後指導して下さっていた吉井先生が亡くなられてからはここ数年練習をせず休部しています。このような状態で上達は望むべきありませんが、ただこれを救えるのは努力と精進しかないと反省をしています。時々ラジオ番組等で練習していますが今後ともよろしくお願いいたします。



三池公恵 (富士工場社員家族・観世)

宇部工場に入社すると同時に、謠を始め、はや、十二年の月日が経とうとしています。その間に、二人の子供の出産や、育児が入って、このごろやっと、謠の本を開く余裕が出てきた所ですが、それもしばしば、二歳の子に中断させられてしまいます。謠を始めた当初は、こんなに長く続くとはいっていませんでしたが、これからも細々と、息長く続けて行きたいと、思っています。



三澤正愛 (東京研究所・宝生)

水原先生の熱心な指導にも拘らず、早々と能力の限界を悟って退部してから、十三、四年も経ちました。会のますますのご発展をお喜び申し上げます。熱海での会に初参加し、他事業所の熱演に圧倒されたことなど懐しく思い出しています。カナダにいたころ十冊の習い本を持っていき、回りの人が謠曲など全く聞いたこともないのを幸い、下手ながらうた(な?)ってみせることが出来たのは、やはり先生の薫陶の賜物と感謝しております。



みねうらかずゆき
峯浦和幸 (本社・宝生)

元宝生流所属。昭和40年に森先輩のワキを努め東研に謠曲部を結成し、以来東研で水原門下生として5年、富士工場で高橋先生の下で2年間お世話になりながら、リタイアしてしまいました。この間、うとう会には4回出席させて載りました。舞台上立つのは苦痛でしたが、聞き役、前夜祭の懇親会には楽しく出席させて載き、よい思い出となっています。今後、ますます、この会が発展するようお祈りする次第です。



みずたきしょういち
水滝彰一 (堺工場・観世)

昭和50年入社。うたいに特に関心はなかったが、謠曲部の部員拡張計画に乗せられてついでに入部してしまった。まだ一年足らずで、内容もわからず見ようみまねでやっているが、腹から声を出すというのは、気分転換にもってこいである。けいこはもっぱら風呂の中で行っている。(だれもない時に)風呂場は音響効果が抜群で、自分でうたい自分で聞きはれているが、長風呂になるのが玉にきずである。



みずはらいっぴょう
水原一飄 (元本社・宝生)

(謠歴) 昭和19年より宝生流に入り、2師を経て、昭和35年より野村蘭作師のもとに入門。宝生流囑託。(小鼓・太鼓)。東京および東研六飄会を主宰。相謠会、翁雪会に参加。過去の能出演―三島1回、佐渡2回、熱田1回、京都1回、大阪1回、東京1回、松山1回。

みずの 水野 学 (まなぶ)
(元四日市工場・観世)



私のうとう会初参加は41年11月(熱海市つるやホテル)でした。その後三井寺、竜野、と不参加したことが残念です。年を重ねはやくも本年は20周年となり、記念誌を発行される計画とうけたまわり、ご同慶にたえません。本年こそは盛大なうとう会でありますように願っております。

みどり 緑 静 男 (しずお)
(四日市工場・観世)



四日市工場技術課勤務です。謡は43年に水野さんにお世話願って、熊沢先生に習い始めましたが、47年にやめました。一方、以前から尺八を吹いていましたので、44年に富岡さんにお世話願って、名古屋の福井先生に笛を習い始めましたが、これも47年にやめました。その後毎年うとう会にだけは参加して、そのつど練習しているのみです。ただ尺八はずっと続けていまして協和の他工場の人と交流したいと思っています。

みなみ 南 亜 夫 (つぐお)
(大阪支社・観世)



昭和40年入社。以来、医薬の営業畑一本で現在に至っております。大阪支社在籍も今年で14年目を迎え、かなりの古株になってきました。趣味といいますが、人に言える様なものはなく、下手の横好きで麻雀とゴルフくらいです。このたび同期の松井君の強引?な勧誘に会い、「うとう会」に参加するハメになりました。かえって足手まといになるかも知れませんが、入ったからには精一杯頑張るつもりです。よろしく御指導願います。

もちづき 望月 美江 (みづき)
(元富士工場・宝生)



昭和26年入社、31年謡曲部入、高橋先生に指導を得、「うとう会」の命名は熱海荘で合同謡会の席上でのこと。謡うと善知鳥をかけて満場一致で決定!!当時参加者は20余名、その内約半数が富士、しかも女性が多く尚年配者は私一人他は皆若いお嬢さんばかりでした。磯部様、新井様始め観世の方々の善知鳥を拝聴しその緩急の妙、情感あふれる謡に胸せまる感激をしましたのも、そのころの忘れ得ぬ思い出でございます。

もも 瀬 三 雄 (ももせみつお)
(土浦工場・観世)



「どんなに悪声でも、どんなに音痴でもできる」という話で始めて、一年たち三年たち、声質、音量、音楽的素養がなくて、とてもまとまりのつかないものだと感じるにいたる。努力だけでは謡にならない。しかし美醜・巧拙を別にすれば、趣味としては、良いものだと思います。情感ゆたかに朗々とうたいあげる謡曲を聞くたびに、私は感銘を受ける。続けるべきか。

もり やすき
森 泰城 (本社・宝生)



謡を始めるキッカケとなったのは水原先生が東研におられた頃、「音痴でスケベで図々しい奴は一番謡に向いているからお前やれ」といわれて引っぱり込まれたのが初めて、38年のことだった。その後米国留学などで4年程中断したことがあったが、いまだに続いているのは謡の魅力か、はたまた今でも非常に熱心に教えて下さっている先生の魅力か。ちっともうまくなならない弟子であることには先生もあきらめておられることは確か。

もりひろただ
守 弘 董 子 (家族・元防府工場・観世)



もりもと
森 本 真 (富士工場・宝生)



もりやまさよたか
森 山 清 孝 (元本社・観世)



約十年前、本社在職中わずか一回「うとう会」に参加した私が、会員名簿に名をつらねさせていただくのもおこがましい次第ですが、当時一緒に練習していた方々が活躍されているのを見、聞きするにつれ、当時がしのばれてなつかしくもあり、月日の経過の早さを今さらのように感じないではおれません。20回の「成人」を迎えようとするうとう会が、今後ますますすこやかに成長し、発展し続けることを祈っています。

もりわき
森 脇 亮 (防府工場・観世)



昭和28年夏、先輩Y氏の勧めでこの道に入る。最初は「橋弁慶」だったと思う。水野さんに五ヶ六曲習い穴を割る。その後新井先生に習い、次第に謡曲の面白さを知る。しかし依然として正座をすると、三十分でダウンするという不真面目生徒であった。昭和32年頃かと思うが観風会に入会し丁師につく。厳しい先生で叱られるのが怖さに熱心に稽古した。しかし最近になり、またまた大きな壁に突き当たり、25年を経過して浪々の身となる。

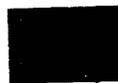
(ま 行)

やぎこういちろう
八木 宏一郎 (堺工場・観世)



55年5月入部。謡始めてまだ一年の伸び盛り。うなるほどに声もほどよく、顔色良くなり酔い心地。ストレス解消にもなって、やはり謡は参加するもの、自分でうたうものと思えます。少々落ち込んでいた時一度謡を始めれば、声にも張りが出、元気になるから不思議です。良き師、良き仲間に出会って今後も楽しくワイワイ息長く続けていきたいと考えております。(54年入社 総務課所属)

やぐらまきちゅうじ
八倉 巻 忠 二 (元本社・観世)



初めて「うたい」というものに接したのは、昭和16年東北沢の協和化学研究所でした。あれから既に四十年、その間病氣や転勤などでおけいこを中断する方が多く、先生についてのけいこは、十年にも満たないでしょう。「協和うとう会」がなければ、私は謡曲から離れてしまっていたでしょう。「うとう会」の今後の発展にあやかりながら、細く永く老後の楽しみの一つとして行きたいものです。

やすじま
安島 将 (本社・観世)



森脇亮さんを先生に、昭和37年の防府工場時代に謡を始めたが、完全なブランクの時期や稽古にあまり出られない状態があったりして年数と実力が比例しない。労働組合専従であることの便利さからか、いつの間にか「うとう会」の事務局ということになった。長年ほんとうによくお世話いただいた高橋孝夫さんや水原一瓢さんと同じことはとてもできないが、山家多喜男さんはじめみなさんのご協力を得て、できるだけ努力を続けたい。

やすちか
安近 毅 (大阪支社・観世)



もう15年以上も昔のことになりますが、高橋孝夫さんや水原さん、中村信郎さん達ベテランの方々の勧めで入門し少しやることがあります。その当時ご指導を受けた鶴亀等が今でも懐しく思い出されます。その後ずっとご無沙汰していますが、このたび協和うとう会が20周年を迎えられる由、誠に同慶の至りに存じます。協和うとう会の今後のますますのご発展をお祈り申し上げます。

やなぎ
柳 淑子 (防府工場・観世)



我が家の机の上には、いつも謡本が置いてあります。この謡本こそ私の心の友なのです。主人を亡くして苦しい日々の明け暮れに謡本は私を、ある時は静かに慰め、またある時は厳しく励ましてくれました。子供達がそれぞれ巣立った後は優しく心の渇きを満たしてくれました。謡本はその豊かな内容で自己を修練することも教えてくれました。謡本との出会いがあったならばこそ、私の現在の幸せがあるといっても過言ではないでしょう。



やまが たきお
山家 多喜男 (四日市工場・観世)

47年の妙法華寺での会に初めて参加して以来、今年で10年目を迎えます。この間、諸先輩のすばらしい演技に魅せられ、また、いろいろな方々ともご縁ができて、今では、年一度お会いするのが楽しみです。最近では、少しは会のお役に立てたらと、番組の編成を支持しています。これからも、謡と小鼓の修練を重ねて、うとう会とともに、細く長くお付き合いをさせていただきたいと思っています。

やまが たしよこ
山縣 頌子 (本社・宝生)



入門よりはやくも10年以上の歳月が流れました。怠者の弟子を破門もせずによく今日まで指導してくださったことを有難く思います。「許」の沙汰も金次第の都会地の風潮の中にあつて芸の伝承を中心とした環境を得られたことは何にも換えられない幸福と感謝しております。協和うとう会の今後ますますのご発展をお祈りするとともに、私も出来るだけはお稽古を続けて行きたいと思っています。



やま だ よしゆき
山田 義之 (堺工場・観世)



職場は、研究室研究グループです。謡曲歴は、十年の節を越えました。仕舞も少し習っています。うとう会参加六回。堺工場の世話役をひきうけてから五年になる。部員は昨年から六名増加し、現在十一名になり活気あふれている。これからも堺工場謡曲部の維持発展に務めたい。



よし だ あやこ
吉田 綾子 (元本社・観世)



謡を始めて一年半、まだまだ謡のことについては何もわかっておりません。でも、一人で大きな声を出して謡っている時はいろいろなことを忘れることができます。そして、謡った後の気分は人には言えないものがあるような気がします。これから先も一つの楽しみとしてずっと続けていきたいと思っています。そして、できれば自然に謡を口ずさむことができるようになりたいと思っています。



よし だ のりこ
吉田 紀子 (東京支社・観世)



謡から遠ざかって早や三年余。社内報で、うとう会の記事を懐しく拝見するようになっておりましたところへ今回の知らせ。何となく現役に戻していただいたようで、うたいがまた、身近に感じられてまいりました。20周年記念会―ぜひ参加してみたい、などとも思ってみる今日この頃です。(ただし、見学でありますが一)

(や・わ行)

わたなべ 渡辺 薫 (元本社・観世)



兄の謡う観世流に惹かれて謡曲が大好きになりました。たまたま電車で会った浜野さんの持つ手本で質問したら本社で始めるとのことです。蚊のなくような声から出して大声を出せる時のうれしさ、十冊近く終った所で仙台転勤。仙台では良師が見当らず止むなく民謡を始め「さんさ時雨」を覚えたころにノドを痛めてしまいました。現在は謡曲も民謡も唄えませんが「協和うとう会」の仲間には入れておいて下さい。

わたなべ 渡辺 富和 (元宇部工場・観世)



32年8月入社、販売、原動、二課、安全、技術(環境)54年2月退職。現在富士運輸在職中。宇部工場に謡曲部ができて入部、防府・門司・宇部の合同大会が年一回開催、楽しみでもあり重荷でもありました。今では楽しい思い出の一つとなっています。好きなもの羽衣・熊野。今はなき吉井先生のご冥福をお祈りします。謡は昔の物語や中国の故事など多く、幻想の世界にさそい込まれます。また友情を深め、ストレス解消に大いに役立ちます。

わたなべ 渡辺 昇 (土浦工場・観世)



謡曲のサワリに接した程度の実力もオボつかないことを自覚しているので、決して「謡曲を練習しています」などとは人様の前では発言しないことにしているのですが、「うとう会」は楽しい年中行事の一つになっています。それは①いつも存分に飲めること②名所旧跡を訪れること③蛮声を出して体毒が一扫されることetc...。みんな幹事様の好手回しのお陰です。リフレッシュノ練習に精を出して次回に備えます。

後記

▼いよいよ20回目を迎える協和うとう会の延べ参加人員は、第20回までで一、四四名という計算になります。参加を希望しながらいろいろな事情でやむを得ず不参加となった同好の士も加えるならば、どれくらいの数になるでしょうか。▼表紙の題字とカットにはじまる「手づくり」の「二〇周年記念誌」です。ここに凝縮された協和うとう会の歴史と次の発展への意気を、会員以外の人たちにも広く理解していただきたいものです。▼水原さんならではの「20年の足跡」。ちょっとまねのできない力作です。▼会員名簿は原稿依頼からかなり時間を経過しているため異動も発生していることを承知しながらフォローできず、原則として取材時のままです。▼いくつかの反省点を残しての発行は心苦しいかぎりです。(安島)

うとう

協和うとう会二〇周年記念誌

昭和五十六年十一月七日発行

東京都千代田区大手町一―六一―

協和醗酵工業株式会社内

協和うとう会